

詩話会が開かれました

去る7月17日、大阪市立区民センターで行われた詩話会は42名の参加者で、時間を忘れるほど充実した内容だった。

司会佐古祐二

第一部

朗読文化の会「あい」の会員が、「関西詩人協会設立当時の詩人」6名(杉山平一、志賀英夫、島田陽子、高橋徹、福中都市子、水口洋治)の作品を朗読した。



講演は原圭治氏が右記の詩人について沢山の資料を読まれ、丁寧な資料を配布。経歴、活動、作品等について話された。(以下その概略)

杉山平一氏・1914年、会津若松生まれ。後に宝塚に居住、四季派の最後の詩人。短い詩に深い人生がある。第一詩集『夜学生』。最後の詩集『希望』で30回現代詩人賞を受賞。反戦的思想を持っていた。同人誌「大阪文学」を織田作之助らと作る。映画評論を書いた。

志賀英夫氏・1925年、丹波生まれ。入隊、家も空襲で焼かれた。句集は『椎の実』をガリ版で出した。詩集は『ポケット帳から』のみ。1946に「柵」を創刊。しばらく休刊の後1986年に復刊。「戦前の詩誌・半世紀の年譜」を連載、約2000点の詩誌の存在の確認をした。1947年「近畿詩人会」の発足に加わる。松竹座で毎週土、日曜日の

夜に、戦前「国民詩の夜」として行っていたものを「現代詩朗読の会」として復活させた。

島田陽子氏・1929年、東京生まれ。11歳で豊中へ移住。父との葛藤が文学の原点となる。万博の歌に「世界の国からこんには」が入選。大阪ことばに拘り、童謡、大阪ことば歌・方言詩を多く作った。合唱組曲の作詩も多数。

高橋徹氏・1925年、大阪府生れ。朝日新聞記者をしながら創作活動をする。月刊「灌木2次」は喜志邦三氏の死後後継者となる。季刊「ガイア」の代表者。第一詩集『素描くスモングの底で』。公害、砂漠、生き物に関心を持ち、詩を発表し続けた。

福中都市子氏・1928年、東京生まれ。52年に結婚し大阪に住む。小野十三郎に師事、第一詩集『灰色の壁に』。『福中都市子全詩集(第11回小熊秀雄賞受賞)』『女はみんな花だから』など詩集多い。コミュニティ誌「ひまわり通信」、詩誌「陽」を出す。2001年6月「現代詩平和賞」を自ら設立した。公立の文学館を願って運動をするが実現しなかった。現在もその願いは受け継がれている。

水口洋治氏・1948年、大阪生まれ。大阪における詩朗読運動体「風」を創設。詩誌「PO」の創刊にもかかわった。高校の教師。後大学教師を勤める。詩集6冊、文芸評論4冊を出した。ハーフについてコンプレックスがあったようだ。音楽が好きで大阪フィルの合唱団に入る。大学教師になってから精神を病みながらも、最期まで詩人であり続けた。

第二部

大倉元氏の司会で、瀬野とし、原圭治、左子真由美氏による鼎談が行われた。

※関西詩人協会設立の苦労話について
瀬野さん 第一回自選詩集の編集をした。二〇一人の参加があり、杉山さんが前書きを書かれた。

左子さん 2年ぐらい準備して関西詩人協会が発足した。(原、志賀、水口、左子) 入会の資格は、詩の愛好者ならだれでもいいという考えが特筆される。

原さん 大阪に文化のルネッサンスをと黒田知事が誕生。その時大文連が設立された。当時「大阪に文学館を」と声をあげ、関西詩人協会ができた。

※女性が目立った時、男性はどんな方がおられたか
瀬野さん 朝比奈宣英さんがおられ、ハイカラな詩を書かれた。栗田茂さんは生活詩を書かれた。

原さん 朝比奈さんは志賀英夫さんのことを言われた。難波利三さんは「詩人は群れて書いています、小説家は群れて書けない」と云われた。

左子さん 発足当時の運営委員会は激論が飛んだ。福田万里子さんは控え目で優しくあったけれど、病気で亡くなられた。2005年の総会の時に「またたく星が好きだ。またたくことは生でまたたかないのは死」というニジンスキーの言葉を引用して「関西詩人協会で、またたく星にたくさん出会いました。」と話されたことが印象に残っている。

※近畿の団体と何かイベントをしては
左子さん 賛成です。お隣なので兵庫県現代詩協会とぜひ一緒に何かできればと思います。

原さん 一昨年のイベント「詩はどこへー」は全国版にしてしんどかった。とりあえず近畿でやればよい。「風」は垣根を外して朗読の役目をはたしてきたことは大きい。榊さん(イベント係)、外に開かれたことをしてはどうか。

※もつと現代詩を知ってもらおうには
読売新聞で一月に一回一般からの作品が載っている。俳句、歌、川柳、詩で、いつの間にか詩だけなくなつた。徳島新聞で「やんぐ・ポエム」があり鈴木漢さんが選者をしている。赤旗日曜版に瀬野さんが、投稿詩に批評を書いている。朝日新聞に倉橋さんが詩集を取り上げている。

当会会報は震災に即応した記事を取り上げている。志賀さんはアンソロジー『阪神淡路大震災詩集』を三冊出された。福中さんは詩を書くだけでなく、新人を育てられた。日高てるさん、島田さんも若い人たちを育てられた。積極的に詩を広める事が大切で私たちも若い人を育てる積極的な活動をしてゆきたい。(文責 名古きよえ)